

十 可部女子短期大学の新設

短期大学設置
準備にかかる

商業科校舎の建築と並行して、短期大学新設の準備に、昭和三十六年（一九六二）二月頃より取りかかったのである。

まず本学園は、女子専門学校も高等学校も共に家庭科から出発しているので、短期大学も被服科から出発することにした。

文部省へもたびたび参り、技術教育課や振興課に行つて相談したり、指導を受けたりしながら、設置基準に合わせて、校地・校舎・設備・図書さらに経営能力があるか否かを検討される材料とするために、設置年度の二年前と二年後の、四年間の経理一覧を作るのである。その財政面を私が担当し、大下とみえ氏が付いて手伝つてくれた。教授陣容やカリキュラム構成等の教育面を、当時広島大学大学院博士課程三年であつた横山邦治氏が、昼夜の別なく大半こ

のことにつきつかりのように、礼法室の一角を使って、もっぱらその準備をしたのである。横山氏の方は一人で担当したが、しかし私もその方面へも首を突っ込んでやった。

また、文部省や審査委員（大学設置審査委員、私大審査委員）の二方面へも出向いて、御挨拶や御指導を仰ぐためにたびたび上京していたのである。東京都内はもとより、広く千葉・埼玉県方面までも幾度となく出向いて御指導を仰ぐなどして、万全を期すことに努力した。

可部女子短期大学 提出期限は九月三十日であったが、皆が緊張してやったお蔭で、九月十五日までに完成した認可申請書提出 ので、さっそく、小荷物として三十キロのものを二個にして十六日に広島駅を発送した。

私と横山氏は十七日の汽車で出発、十八日未明東京駅に着く。小荷物受取場に行ったら、幸い荷物は着いていたので、タクシー二台で文部省に運んだ。

それからが大変、経済面の書類、教育面の書類、各々の厚みが二十センチ近いもの六冊、正副各々二冊、学校の控各々一冊、その他私大審委員用、大学設置審査委員用、それぞれの部門別のものが数種類を二十冊、三十冊というように提出するので、大きな荷物にもなるのである。これをいちおう庶務課の方へ提出しておいて、今度は三十日までに文部省の方で決められた日時に再び出向いて、文部省の一つ一つの質問に答え、また我々からも説明するなど、あれこれ多忙であった。そこで、文部省の方でその書類が完全とみなされたら受理されるのである。それまでに、私は設置基準に従って書類を作って、文部省のそれぞれの係官の所で内容を見てもらい、良くないところはやり直し、差し替えるなどして、これで良いといわれたものを正式に印刷して提出するようにしていた。すなわち、正式受理をしなくてもらうまでには、ミスのないように整えていた。

しかし、何分にも初めてのことで、様子も要領も解らず面喰うことも多かったが、しかし、文部省でもそれぞれの

部門で比較的懇切丁寧に御指導下さるので、それをよく聞き、よく守り、係官のおっしゃる通りに整えているので、正式受理のときには、誠にすらすらと何の疑義もなく受理してもらえて嬉しかった。今もなお、あの時の場面を思い浮かべると微笑ほほえましくなるのである。

現地審査 現地視察が短期大学新設のときには、私大審委員と大学設置審委員との二回にわたつてあるのであるを受く。が、第一回は三十六年十一月十一日に私大審委員が来られた。短期大学の校舎としては、本館を充当した。

施設設備・図書・標本類等、すべて設置基準を上廻るくらい完備していたので、審議委員の注意等もなく、全委員から、特に日本女子大の氏家寿子教授からは、「学長さんのご専門ですので、何も申し上げることはない。誠に立派です。」と賞めていただいた。

次に、大学設置審委員三人が、十一月十六日に来校された。この時もあまり注意はなかったが、教授の研究室をもつと充実さすようにとのこと。それは、二人で一室というところもあったからである。一人一室にするようにとのこと、また染色室が臨時的なもので三十八年度内につくる予定であったので、その図面を添付していたのを見て早く建てるようにとの注意であった。あとは前者と同じように、別に指摘するところはないということであった。

次は、設置認可証が下りるか、下りないかの問題である。これは、三十六年度大学および短期大学の設置認可申請されている全国の学園へそれぞれ手わけをして現地調査されてから、私大審委員会、大学設置審委員会が開かれて審議される。認可の可否が決定するのが二月二十日頃になるということであった。それが待ち遠しく、また心配なやらの毎日であったが、人事を尽くして天命を待つという言葉のように、私としては現在の経済状態として、また私の力としては最善を尽くしたのだから、それから先は神に仏にまかせるほかはないと思い、二月を待ったのである。

設置認可さる

ところが二月二十日、文部省から電話で二十日認可証を発送したからとお知らせをいただいたときの感激、喜びは説明できない。涙、私の長い間の思いがかなったことの喜び、私のような無学文盲な者に大学経営を委ねて下さった有り難さ、もつたいなさ、また一面、現在以上の大きな責任を背負ったこと、この役目を立派に果たさねばならぬと、決意と覚悟を一段と強めた。

ここにおいて、本学園発足時の女子専門学校は新設短期大学の母体となつたので、三十六年度をもって廃校とした。すなわち、発展的解消となつたのである。そして三十七年度から既設の高等学校を短大の附属高校とするので、高校に普通科を新設した。

横山邦治氏は、長い間の大きな苦勞が報いられて責任が果たされたことも嬉しいので、「万歳」と大きな声で手を挙げて我が事のように喜んで下さった。私は、横山氏に深く深く労を謝し、厚くお礼を言った。それとともに、強い決心を我れと我れに誓った。必ず立派な大学にすることを。

お礼廻り後の横山氏の厚い看護

設置認可証が届いた翌日、さつそく、横山邦治氏と二人で上京した。文部省の各関係課、技術教育課・振興課・庶務課・教員養成課、大学局長（当時の局長は小林行雄氏）、管理局长宮地茂氏、その他大学設置審議委員等を訪ね、厚くお礼を述べるとともに、今後の努力を誓つたのである。

六人の審議委員宅を廻り、最後の委員さん宅（法政大学の先生だった）を出てバス停まで出る途中から気分が悪くなり、目まいがして息苦しくて歩けなくなつた。ちょうど幸いにその近所に薬局があつたので、そこまで横山先生の腕にすがって連れて行ってもらい、病状を薬局の方に申して、二、三種の薬をいただき、そこで飲み、しばらく休ませてもらった。横山先生の親切な心づかいと薬のお蔭で、一時間ほどで胸も楽になり気分も落ち着いてきた。

その日は予定のお礼廻りを終えて広島に帰ることになっていたのだが、横山先生が私の病状を心配して、到底この状

態では広島まで帰れぬであろうから、神原の寮まで引き返して、二、三日静養してから帰広したらと奨めて下さったが、私はその親切な言葉に従わないで、無理を押しして帰広することにした。それは十有余年の病床から立ち上がった、三年足らずのときなので、「元の病気の再発であった場合は、また東京で一年も二年も動けなくなるかも解らん。いや、もうそのままになるやも解らんぬ。」と思ったからである。とにかく、学校まで帰っておかねばという気がしたからである。

横山先生が帰途の車中を気遣われ、私には内緒でグリーン車にして下さった。節約家の私にグリーン車にすると言葉ば、きつと断ると思われたからであろう。ご自分は普通車なので、私の席までたびたび足を運び、色々とお世話をして下さったのである。肉親にも勝るきめ細かい至れり尽くせりのお世話をして下さったお蔭で、途中順調に帰広することが出来た。

横山先生には学校のことはもちろんであったが、私個人のこともこうした病気をしたときなどはもちろんである、いつも親切にしていただき有り難く感謝しているが、あの東京のど真中で動けなくなったとき、真心こめてお世話を下さった有り難さは、今なお忘れられない。いや一生忘れられぬことである。

帰宅して二、三日は休養したが、次の段階（発足の準備）に入らねばならぬので起き上がった。喜びと希望に燃えている毎日なのだから、病気もどこかに吹き飛んでしまつて、いよいよ本式な学生募集、県下の高校にご挨拶廻りと、忙しい毎日であった。

可部女子短期 大学開学式

可部女子短期大学被服科認可は、三十七年（一九六二）一月二十日付であるが、同三月二十八日付で可部女子短期大学被服科卒業生に「中学校教諭二級普通免許状家庭」付与の認定があった。入学生定員は四十名であるが、応募者の関係で、二割増として五十一名の入学許可をした。

喜びと希望に満ちて開学準備をしてきたが、いよいよ開学式の日がきた。四月十日、小講堂の会場に学生、父兄、教員入場、高校からも御臨席をいただき、厳肅な中に全員、喜びと希望に満ちた意義ある開学式を挙行できた。

この短期大学校舎には、三十六年六月に完成した鉄筋三階建て七〇〇坪の建物を充当したのである。

第三校舎 新築

終戦直後の出生率の高かった子供が、三十七年頃から高等学校に就学する時期となったため、高校生の数が七三八名となった。したがって校舎が狭隘きょうあいということになり、この年も前年に続き校舎の建築をしたのである。

木造二階建て一部鉄筋三階建て（三三二坪）は、理科（生物・化学・物理・地学）、社会科学等の特別教室である。三十八年度の短大の一、二年の学生数が一一四名で、高校生はこの年が最もピークの年なので校舎の狭隘を感じながらも、中学校からの強い要望に応えなければと思ひ、四百余名を受け入れた。三十七年に建築した三三二坪の特別校舎の一部を除き、普通教室に使用せざるを得ない状態となった。

短大に食物栄養科増設

三十九年度より短大に食物栄養科増設の予定で、その準備に取りかかり、三十八年（一九六三）九月三十日設置認可申請書を提出した。



可部女子短期大学校舎 1964年当時



食物栄養科の授業風景 1966年

なお、その準備としては、校地を現校地（旧中島校地のこと）の続き、東側に二二五坪求めた。そこに屋内体育館（鉄筋造重鉛メッキ銅板葺平屋建て二八二・五坪）を建築し、短大と高校の共用とすることにした。それと共に西

南側に短大校舎として、鉄筋三階建ての集団給食室、調理室、染色・被材実験室等、四四五坪の校舎が三十九年三月二十日に竣工した。

こうした施設のための資金繰りに東奔西走、一方では学科増設申請書作成に大わらわであった。幸いにして学術共に卓越した立派な教授の方々を招聘しょうへいすることができ、充実した教授陣となった。文部省からも賞めてもらった。

十一月中旬には現地審査も終わって、一月二十日前後の認可の可否を待つ。今回の申請は二回目なので、初めての被服科設置申請時よりか落ち着いた気分であった。そのときも文部省

設置認可が三十九年一月十七日であった。そのときも文部省から前もって電話で知らせをいただいたが、認可証を手にしたときは、やはり以前と変わらない喜びと責任を感じることににおいては同じである。

三十九年二月二十四日、食物栄養科卒業生に中学校教諭二級普通免許状（家庭科）付与の認定を受けた。

続いて三月三十一日、食物栄養科の栄養専攻卒業生に栄養士養成施設として指定を受けた。栄養士養成は、文部省の指示を受け許可をもらっただけではいけないので、厚生省管轄の認可を必要とするのである。厚生省の方は、県の衛生部を経由して申達してもらわねばならぬことなので、それには色々と苦労もあったが、幸いに砂原格先生が当時厚生省の政務次官であらせられたので、随分と力になって下さり大変助かった。

三十九年四月から短期大学食物栄養科をめたく開学したのである。入学定員八十名（栄養士コース四十名、食物コース四十名）であるが、初年度なので七十四名受け入れた。

高校生急増のため

第四校舎増築

高等学校の方は、前年に続きピークなので、やはり前年と同じように四百余名を受け入れた。ますます施設が不足してくるので、これは永久のものではないのにも思いつながらもちまちま困るので、またまた校舎を一棟増築することにした。完成は四十年になった。

この年の高校生総数は、千四百数十名であった。短大生は一六九名である。いずれにしても大世帯である。高校の教職員が七十名を越え、これだけの陣容を整えるだけでも大変であった。

短期大学に国文科・英文科増設

短大の方は家政系が整ったので、文科系を設置したらということになり、国文科、英文科をそれぞれ入学定員四十名として設



生徒急増期を迎え盛大に举行される高校体育祭 1964年

置認可申請をすることにして、またまた三十九年四月に準備を始めた。

これは施設の方はあまり面倒ではないが、図書館の完備、図書の整備、教授陣の完備等々、家政系とは少し趣きを異にした準備がある。図書購入はリストを作り、紀伊国屋に依頼したのであまり骨は折れなかったが、教授陣容を揃えるのに、またまた東奔西走した。しかし、これも比較的楽に整えることが出来た。考えてみるに、伝統のある文科系の学者は、家政系より比較的多いのではないかと思う。

前例の如く、これも九月三十日までに申請書を文部省に提出せねばならないので、それまでに幾度となく文部省を訪ね、係官に色々御指導と御指示を仰ぎながら作り上げて、九月二十八日に上京し提出した。現地審査がいつものように十一月中旬なので、それまでにはやはり校舎も教室も研究室も図書も整えておかねばならぬので、それらの手配はもとより、その資金繰りも大変であったが、何が何でもやらねばならぬという意気込みでやった。

六人の審査委員の現地審査も無事に終わり、翌四十年一月二十五日に設置認可が下りた。そして四月一日、国文科、英文科を開設したのである。入学の定員は各四十名であるが、国文科四十三名、英文科三十九名を受け入れた。短大生総数は三四一名となった。

小規模ながらも、四学科二専攻となったので、ひとまず短大の学科増はこのあたりでしばらく中止しておくことに腹を決めた。

高校家庭科を被服科と食物科に

高校の家庭科の拡大と時代の要望に応え、家庭科教育の徹底を期するため、食物科と被服科に学科組織を変更して、専門的な教育をすることにした。食物科卒業生には調理師の資格が得られるようにしたので、喜んで多くの者が応募するであろうと思つたが、初年度も二年目も定員に足りない状態であった。そうしてみると、食物・調理・栄養といった、人間が生きていく上に最も大切な、いや一生必要な学問に、

高等学校課程においてあまり関心がないのかなーということを感じるようになった。そうとなれば、啓蒙の必要があると思う、食物科の使命を理解さすべく相当強く説明して廻ったが効果が薄い。

四十年度の入学生数は前年とあまり変わらぬほどであった。高校入学生は、三十八、九年度が最高で、その後は段々と子供の数は減ってくる時であった。

十一 広島文教女子大学の新設